自分自身が災害（地震や風水害など）への備えができていると思っている人の割合 37.6%

※「高浜市市民意識調査」（平成27年4月実施）による

9月1日（火）は「防災の日」。6日（日）には、市内各所で総合防災訓練が実施されます（広報8月15日号参照）。この機会に、今一度、防災・減災について考えてみませんか？

高浜市の地域防災力向上に向けて、日ごろからアドバイスをいただいている栗田暢之氏に話を伺いました。

「自分だけは大丈夫」と思っていませんか？

一人ひとりの意識向上と実践の積み重ねが地域の防災力を高める！

栗田暢之氏

認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード代表理事。ほかに、東日本大震災支援全国ネットワーク代表世話人、震災がつなぐ全国ネットワーク代表などを務めている。

阪神・淡路大震災20年の節目に改めて考える

阪神・淡路大震災（平成7年）の死傷者の多くは、家具の転倒防止など、あらかじめ各自が対策を行っていれば救われていたといわれています。また、救助された人の約8割が地域住民による救出で、そのうち約8割は生存者の救助でした。一方、自衛隊・消防隊による救助は約2割ですが、そのうち半数以上は遺体の救出でした。消防車は台数にかぎりがあり、家屋やブロック塀の倒壊、液状化がおきていれば、道路を通ることもできないでしょう。行政力を過信してはいけません。早い救出が生死を分けました。いざというとき、ご近所同士の助け合い・支え合いが鍵なのです。

東日本大震災（平成23年）の津波の印象が強く残っていますが、家具の下敷きになってしまっては、津波から逃げることもできません。また、火災の場合でも、火が小さなうちに消すことができれば、延焼を防げます。火の元の確認、電気のブレーカーを切るなど、一人ひとりのちょっとした心構え・対策が、地域の安全・安心を守ることにつながるのです。

今の、未来の子どもたちを守るために

過去の災害の教訓を風化させず、教訓としていかし続けることが大切です。例えば、伊勢湾台風（昭和34年）からは60年近くが経過し、当時の記憶を鮮明に覚えている人もだんだん少なくなりました。

災害は、かならずやってきます。今を、そして未来を生きる子どもたちを守るために、私たち大人がしっかりと記憶・記録を語り継ぎ、対策をする姿を背中で見せることが大切ではないでしょうか。子どもたちを守るのは、大人の役割です。子どもたちも、大人の行動から学ぶことも多いはず。中学生なら十分戦力として期待できます。

すべては平常時のあり方

対策は今日からでも遅くありません。できることから取り組んでいきましょう。例えば、自分の住んでいる周りの地形や環境の特徴を把握し、揺れや液状化に対する想定をする。家具の固定やガラスの飛散防止フィルムを貼るなど。また近年では、集中豪雨による水害も増加傾向にあります。地域防災力は、一人ひとりが平常時にどんな準備・想定をしておくかにかかっています。